

久留米市都市計画事業

「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

金 丸 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第160集

2000

久留米市教育委員会



花畑駅付近から市街地を望む（南上空から）

序

西鉄大牟田線花畑駅周辺の土地区画整理事業は、西鉄大牟田線の連続立体交差事業と併せて、本市における重要な居住改善事業であります。

さて、金丸川下流域では、宮ノ木遺跡や津福西小路遺跡など弥生～古墳時代の遺跡が発見されています。中流域では津福古賀畑遺跡が知られていますが、そのすぐ上流に位置する本事業対象地周辺において遺跡はこれまでに発見されていません。

今年度から調査を実施した金丸遺跡は、江戸時代から明治時代の遺構や遺物が出土しています。今後、調査が進むにつれて、新たな知見を得ることが期待できます。

本書は調査の成果を報告書として収録したものです。埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、学校教育・生涯学習に活用いただければ幸いに存じます。

平成12年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 桑 野 善 吾

例 言

1. 本書は、久留米市都市計画事業「花畑駅周辺土地地区画整理事業」に伴う『金丸遺跡』の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、教育文化部文化財保護課の園井正隆が担当した。
3. 本書に掲載した図面は、大淵文子・椛島理恵子・原口妙子・広瀬稲子・山下さとみが作成し、遺構配置図はトータルステーションとカタタシステムを用いて図化した。
また、遺物の実測および図面の浄書は小澤知美（非常勤職員）・米澤美詠子（非常勤職員）が担当した。
4. 本書の遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成し、方位は座標北を示す。
5. 遺構・遺物の写真は園井が撮影した。
6. 本書に使用した遺構表示は、下記の略号による。
SD…溝、SK…土坑、SP…ピット、SX…その他の遺構
7. 巻頭図版に使用した写真は、(有)空中写真企画に提供していただいた。
8. 古文書の解読にあたっては、文化財保護課の古賀正美・水原道範の協力を得た。
9. 調査に関わる遺物や記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本調査の調査番号は199905で、略記号はKMR-1を用いた。
11. 本書の執筆・編集は、園井が担当した。

目 次

1. はじめに	1
a. 調査に至る経緯	1
b. 調査体制	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の記録	3
a. 調査の経過	3
b. 遺構と遺物	4
4. まとめ	15
5. 付編－金丸稲荷社について－	15
報告書抄録	16

1. はじめに

a. 調査に至る経緯

久留米市都市計画事業花畑駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を、平成7年11月29日から平成7年12月21日までに、37箇所に51本の試掘トレンチを設定して行った。その結果、花畑駅南西部の17,200㎡と、駅東側の29,600㎡の2地区が埋蔵文化財の包蔵地であると判断できた。そこで、前者を金丸遺跡、後者を鞍打遺跡と称することにした。

その後、久留米市建設部区画整理課と幾度となく協議を行い、調査にかかる対象地や日程について詳細な部分まで検討した後、平成11年4月21日から本格的な調査を実施した。

b. 調査体制

1) 調査主体

久留米市教育委員会			
教育長	桑野	善吾	
教育文化部長	坂田	博春	
社会教育担当次長	芳司	定	
調査総括			
文化財保護課長	古賀	幸男	
文化財保護課長補佐	萩原	裕房	
事務主査	櫻井	康治	
庶務担当	権藤	節子	
試掘担当	櫻井	康治	
本調査担当	園井	正隆	



第1図 調査対象範囲 (1/6,000)

2) 区画整理関係

建設部長	西川 勝義	都市整備推進担当部長	井上 一也
区画整理課長	松田 勇郎	計画主幹	真名子文男
区画整理課長補佐	香月 司	技術主査	梶島 正順

この他、調査にあたっては、福岡県教育庁・北筑後教育事務所生涯学習課、福岡国際大学教授 山本輝雄氏、ウサイエン製薬株式会社取締役会長 野中萬太郎氏、金丸神社代表宮司 久富清司氏に、ご指導とご助言を受け、地元の方々にはご協力とご理解をいただいた。

調査の現地作業員および整理事業員は下記のとおりである。

〔現地作業員〕

秋永 絹子・上村 初子・大淵 文子・梶島理恵子・堤 佐和子・原口 妙子・馬場八重子
広瀬 稲子・三小田美智子・村上 令子・山下さとみ

〔整理事業員〕

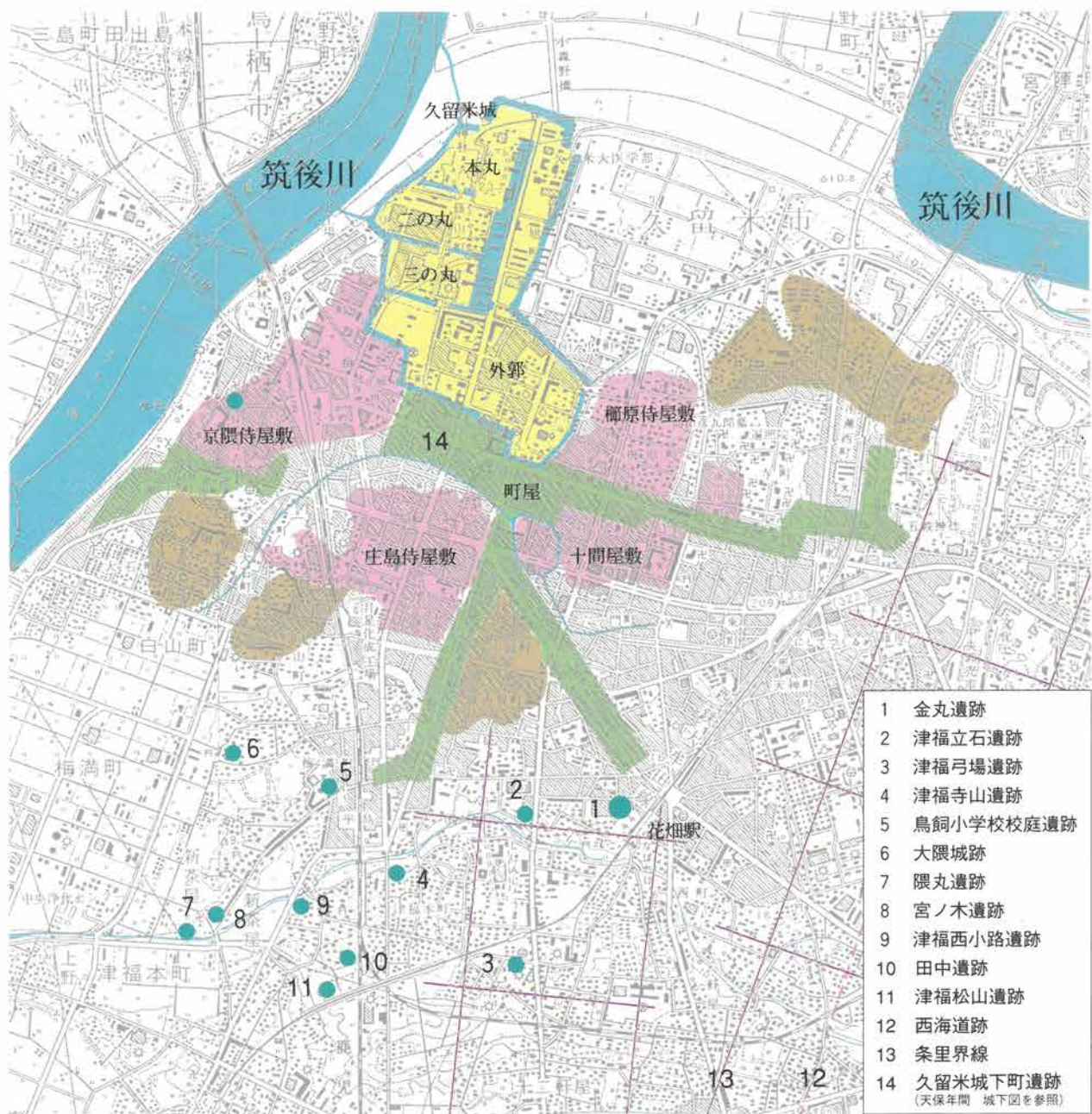
古賀 文代・野口 伸子・栗田 美浦・大村 みき

2. 位置と環境

金丸遺跡は、久留米市の中心部に位置する西町に所在する。この周辺は幹線道路や西鉄大牟田線などの交通の要所となっているため、沿線は商業地として賑やかな町並みを形成している。また、道路から一步入ると、閑静な住宅地が整然と付んでいる。

久留米市街地の東に聳える高良山（標高312m）は耳納山地の西端に位置しており、森林浴をしながら歴史・植物・野鳥などを散策できる山として親しまれている。高良山から西へ派生する低丘陵は、耳納山地に水源を有する河川や、地下水の湧水によってできた河川が、東から西・北へ流路を求め開析した地形が顕著に表れる。このような河川を望む段丘上に数多くの遺跡が存在している。

本遺跡の南側を金丸川が蛇行しながら西へ向かって流れる。この川は国分町山ノ下を水源とし、筑後川に注ぐ。全長7,376mの河川である。金丸川の流域にも遺跡の存在が知られているが、現段階では点在した状況であり、かつ、断片的な資料にとどまっている。



第2図 遺跡分布図 (1/25,000)

3. 調査の記録

a. 調査の経過

調査を実施するにあたっては、事前に建設部区画整理課と協議を行い、期日を決定した。また、調査トレンチの設定については、文化財保護課内で試掘調査の成果を熟慮して決定した。

各調査トレンチに関わった期間・面積等は下表のとおりである。

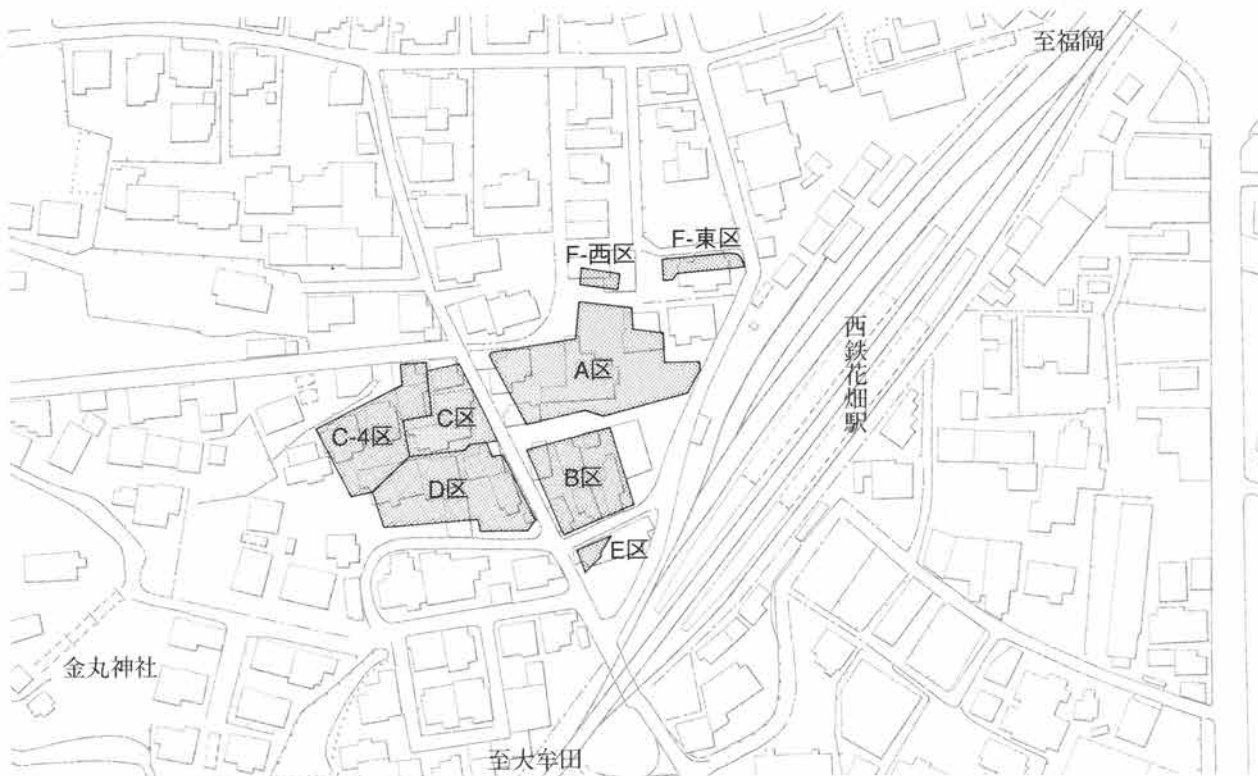
第1表 金丸遺跡第1次調査一覧表

調査区	A 区	B 区	C 区	C-4区	D 区	E 区	F 区
期 間	平成11年4月21日 ～6月15日	平成11年7月13日 ～8月6日	平成12年1月6日 ～1月31日	平成11年10月25日 ～11月26日	平成11年9月20日 ～10月25日	平成11年7月14日 ～7月16日	平成11年6月22日 ～8月2日
面 積	1,032㎡	507㎡	340㎡	573㎡	440㎡	36㎡	147㎡

調査を実施するにあたっては、家屋の解体後も既存する水道やガスの配管に注意を払わねばならず、道路路際から1.5m程の緩衝地を各調査トレンチに設けた。

調査区名は、調査実施計画時に付したA～F区を踏襲したため、実際の調査順序と合い前後する結果となった。調査開始の順序は、A区→F区→B区→E区→D区→C-4区→C区の順である。ただし、遺構番号は遺構検出時に通し番号を付しており、開始順とは若干異なっている。調査区は、7箇所まで8トレンチ（F区を東区・西区に分けた）と、試掘トレンチ1本を合わせると総面積は3,075㎡であった。

平成12年1月13日から1月23日まで実施したG-1区は、時間の都合上、次年度に報告したい。



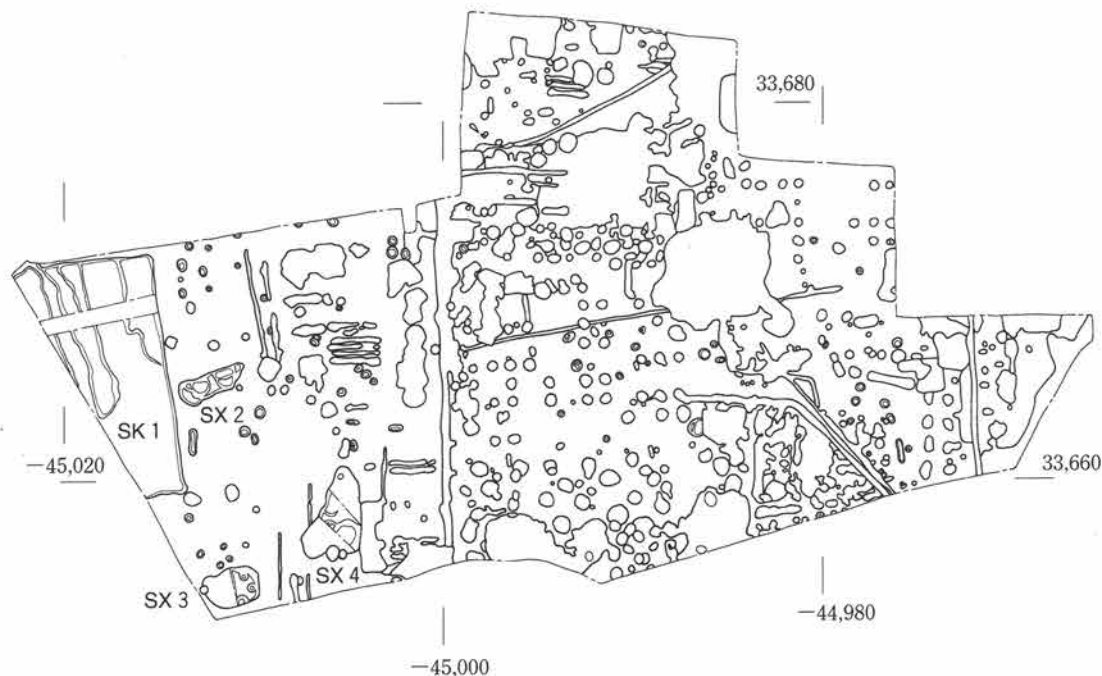
第3図 金丸遺跡第1次調査トレンチ位置図 (1/2,000)

b. 遺構と遺物

掲載した遺構配置図は、発掘した遺構だけに下端を記入し、攪乱等の掘込みは上端のみを記した。

1) A区

表土から5～35cmで遺構検出面に達し、かつ、黄褐色の地山が一面に表れる様相を呈する。家屋が解体された部分であるため、地山面にもその基礎や解体時の掘削痕が認められた。遺跡の状態は最悪といって



第4図 A区遺構配置図 (1/400)

も良い。そういう状況のもと、西端部で長方形の掘り形を有する遺構を1基、ピット約60個、樹木倒壊痕3基を検出した。



第5図 A区全景 (南上空から)

SK 1 (第6～8・11・12図)

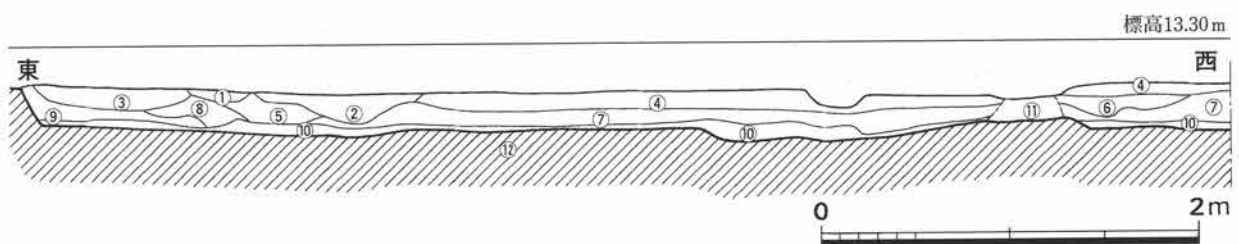
調査区の西端で検出した遺構で、東辺12.6m、北辺・南辺をそれぞれ7.4m・2.1mを測る。西辺は調査区外となり、方形または長方形の形状をなすと考えられる。深さは17～23cmで、上層から褐色土・黒褐色土が堆積し、底面直上では灰黄色の地山のブロックが混入した層を一部で確認した。中央から北側の底面には、南北方面に区切ったかのような掘り込みがみられ、意図的な掘り形と思われる起伏を有する。



第6図 SK 1 (東上空から)



第7図 SK 1北端 (南から)



- | | | |
|------------------|-------------------|--------------------|
| ① 灰褐色土 (ピット埋土) | ⑦ 黒褐色土 (地山ブロック混入) | ⑩ 暗灰色土 (地山の粒が多い) |
| ② 明褐色土 (土坑埋土) | ⑧ 灰褐色土 (硬く締まる) | ⑪ 黄褐色土 (地山ブロックが多い) |
| ③ 褐色土 (土坑埋土) | ⑨ オリーブ黒土 (やや粘質) | ⑫ オリーブ黄色粘土 (地山) |
| ④ 暗褐色土 (砂粒が多い) | | |
| ⑤ 黒色土 (硬く締まる) | | |
| ⑥ にぶい褐色土 (硬く締まる) | | |

第8図 SK 1土層図 (1/40)



第9図 SX 3土層状態 (東から)



第10図 SX 4土層状態 (北東から)

遺物は黒褐色土から出土し、その数は約1200点にのぼる。大半は細片の資料で、中世の青磁や17世紀末の陶器碗、18世紀末～19世紀の遺物が含まれていた。幕末から明治にかけての遺物が最も多く、SK 1の時期を示すものと考えられる。

SX 2～4 (第9・10図)

これらの遺構は、調査区の南西部で検出した。SX 3・4は、中央に黄色の地山があり、その両側に黒褐色土が三日月形を呈する埋土を有している。左の断面写真のように黒褐色土の上に地山が押し上げられた状態である。樹木の倒壊において形成される土層の状態と同様である。

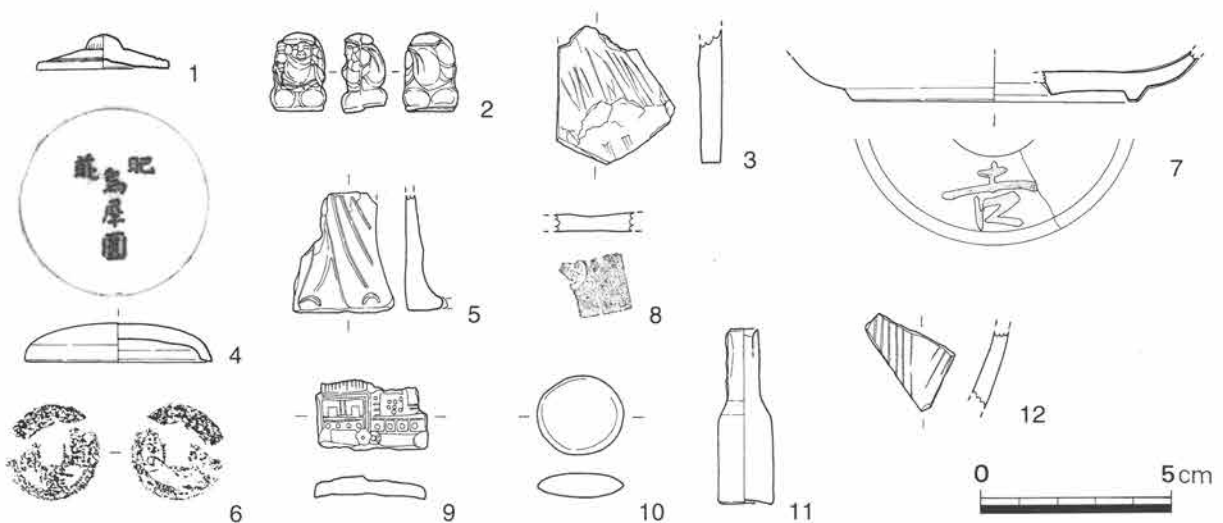
どの遺構からも遺物の出土はなかった。

ピット

調査区の全域で検出したピットのほとんどは、現代のもので、それらと異なる埋土を有するピットが60個程検出できた



第11図 SK 1 出土遺物



第12図 SK 1 出土遺物実測図 (1/2)

が、掘り下げると約10cmで底面に達する浅いピットが多い。これらのピットは、掘立柱建物となり得る柱穴でもなく、かつ、遺物を伴うこともなかった。

第2表 A区SK1出土遺物観察表

No.	出土遺構	器 種	法 量 (cm)			装 飾			銘・印	産 地	年 代	備 考	遺物番号
			口 径	底 径	器 高	絵付・釉薬	文 様	その他					
1	A区SK1	陶器ミニチュア蓋	3.5	つまみ径 1.0	0.9	薄い緑釉					19C～ 幕末		199905 00001
2	A区SK1	土製品 人形	最大高 2.1	最大幅 1.5	奥行き 1.2							素 焼 大 黒 き 天	199905 00002
3	A区SK1	砂岩 砥石	最大長 (3.7)		厚 さ (0.6)								199905 00003
4	A区SK1	磁器 合子蓋	5.0		1.0	白 磁	呉須で文字 を書き込む		肥 前 鳥犀園	肥 前	幕末～ 明治	薬 入 れ	199905 00004
5	A区SK1	土製品 人形	最大高 (3.1)	最大幅 2.6	奥行き (1.0)	一部緑釉						婦 人 像	199905 00005
6	A区SK1	銅銭 乾隆通寶	径 2.59		厚 さ 0.15					清(中国)	1736年	背面の左右に パスバ文字	199905 00006
7	A区SK1	磁 器 皿		(7.6)	(1.5)	白 磁			墨 書 「吉」	肥 前	18C末～ 19C前	蛇ノ目凹形 高台内墨書	199905 00007
8	A区SK1	陶 器 碗				灰 釉			清水力	肥 前	17C末	京焼風陶器	199905 00008
9	A区SK1	土製品 人形	最大高 1.9	最大幅 2.9	奥行き 0.6							洋 館	199905 00009
10	A区SK1	石製品 碁石	長 径 2.2	短 径 2.1	厚 さ 0.7							白 色	199905 00010
11	A区SK1	ガラス 小瓶	0.9	1.5	(4.6)	透 明						薬用アンプル	199905 00011
12	A区SK1	青 磁 碗				青 磁				同安窯	12C～ 13C		199905 00012

【遺物観察凡例】 1. ()内の数値は現存値。 []内の数値は復元値
2. 表の法量項目に該当しない項目については、その都度計測項目を記した。

2) B区

A区に南隣する調査区である。

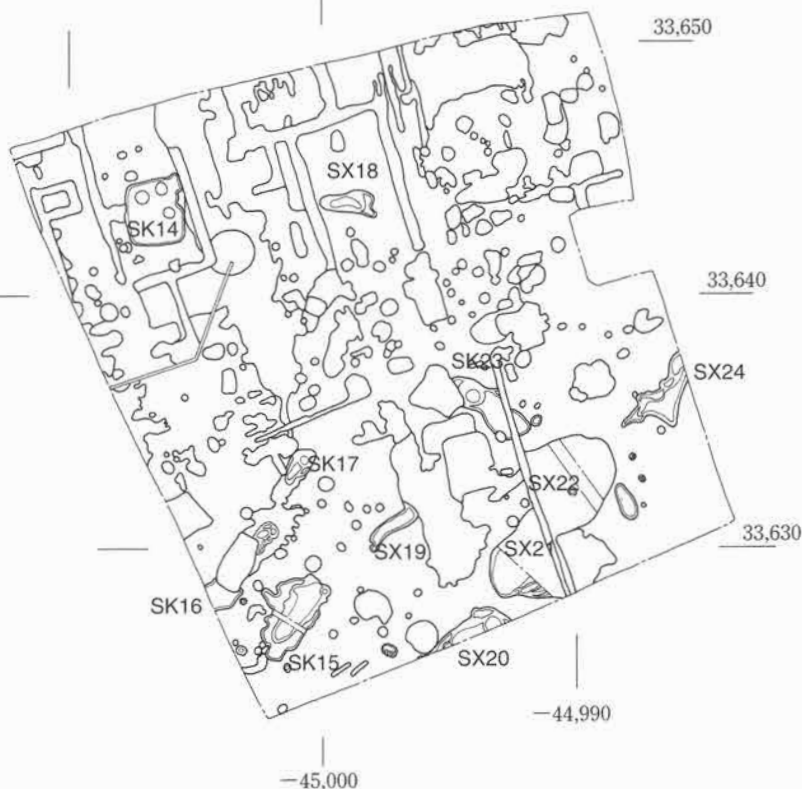
表土から遺構検出面までの深さは、調査区の北半では24～30cmと浅く、南半では35～55cmと深い。そのため、北半の遺構の残存状態は極めて悪かった。

検出した遺構は、土坑5基と樹木倒壊痕6基であった。

SK14

調査区の北西隅で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は長辺2.6m、短辺2.2mで、深さ1.5～10cmを測る。底面は西へ若干下がるが平坦を保つ。

遺物は、磁器碗・湯飲・皿、煙管など32点出土し、18世紀後半～19世紀の土坑であろう。



第13図 B区遺構配置図 (1/300)

第3表 B区SK14出土煙管観察表

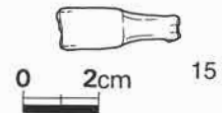
No.	出土遺構	器 種	法 量 (cm)			装 飾			銘・印	産 地	年 代	備 考	遺物番号
			長 さ	吸口肩部径	吸口端部径	絵付・釉薬	文 様	その他					
15	B区SK14	銅製品煙管吸口	3.2	1.1	0.7						18C~ 19C	銅 製	199905 00015



第14図 B区全景（北から）



第15図 SK14出土煙管



第16図 煙管実測図 (1/2)

SK15~17

調査区の南西部で検出した。規模の違いはあるものの、掘り形は同一の方向性

が窺える。それぞれの土坑から土師器、陶磁器が出土しているが、時期・性格ともに不明である。

3) C区 (C-4・C区)

A区に西隣する調査区である。遺構検出面は標高12.950mを示す南部から西と北へ緩やかに標高を下げ

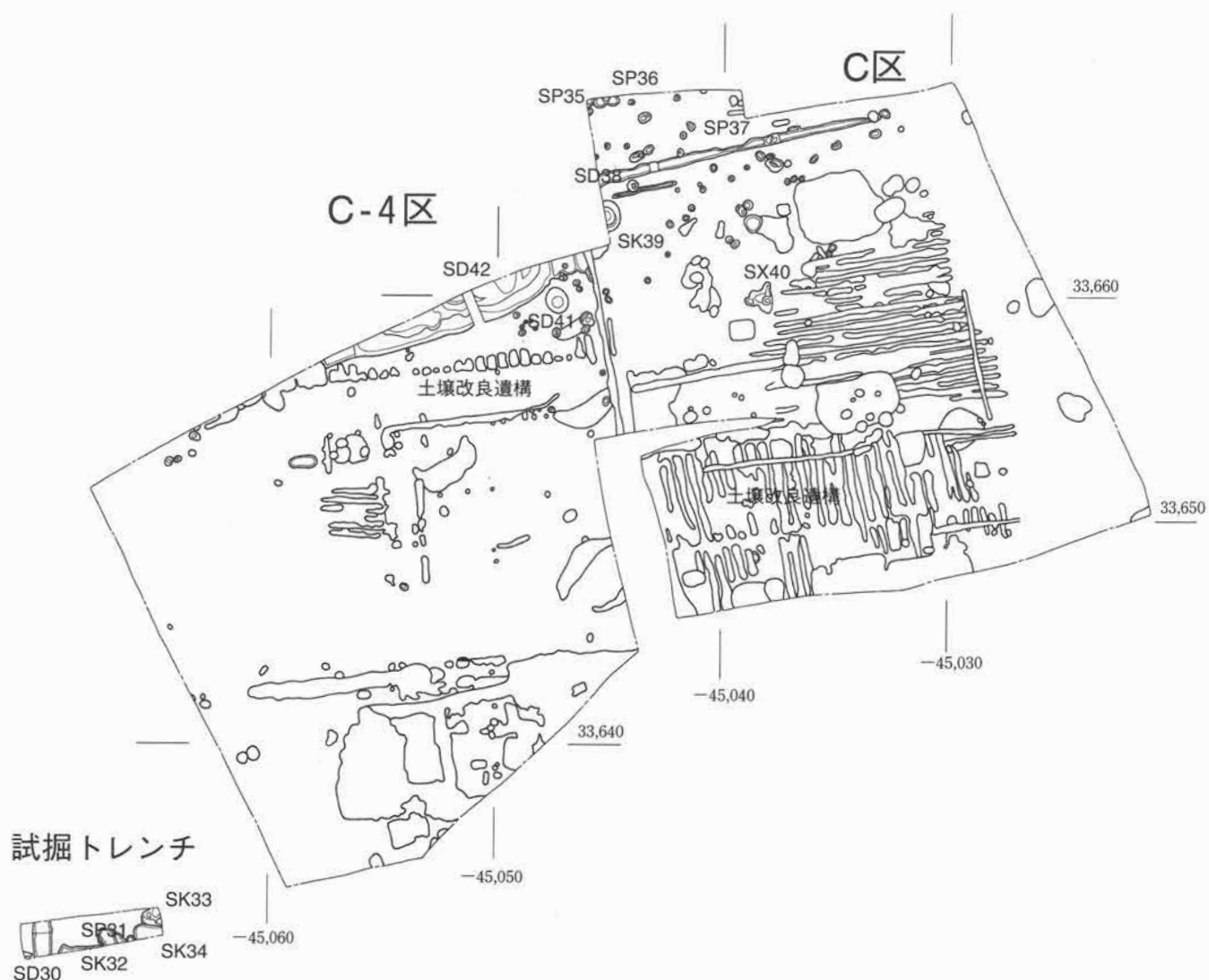
る。本調査区においては、畑地の土壤改良において掘削された短い溝状の遺構が顕著に窺える。この他、



第17図 C-4区全景（北上空から）



第18図 C区全景（西から）



第19図 C区遺構配置図 (1/300)

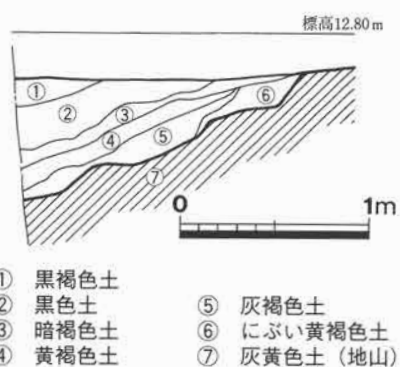
溝2条、土坑2基、ピット約50個を検出した。

S D 38

調査区の北側を東西に走行する溝で、検出長12.2m、幅20～50cm、深さ5～10cmを測る。東から西へ下がり、比高差は約10cmである。出土遺物は陶器瓶、播鉢、土鈴など5点である。



第20図 SD42 (西上空から)



第21図 S D42土層図 (1/40)



第22図 S D42土層状態 (西から)



第23図 C区試掘（東から）

4) D区

C区の南に位置する調査区である。北東側から南西端に向かって約1m下がる地形を確認した。標高11.8mを示す南西端から南へ小さな谷が存在する。

D区も攪乱が著しく、現代の土坑やピットが全域に広がる。北東隅で土瓶を転用した胞衣壺を検出した。

SD42（第20～22図）

調査区の北端に位置し、土壌改良遺構の下層で遺構の一部を検出した。規模は判らないが、黒褐色・黒色の埋土を有する。下位には粘質の黄褐色土が薄く堆積する。遺物は播鉢・土鍋・砥石など6点で、19世紀代の所産である。



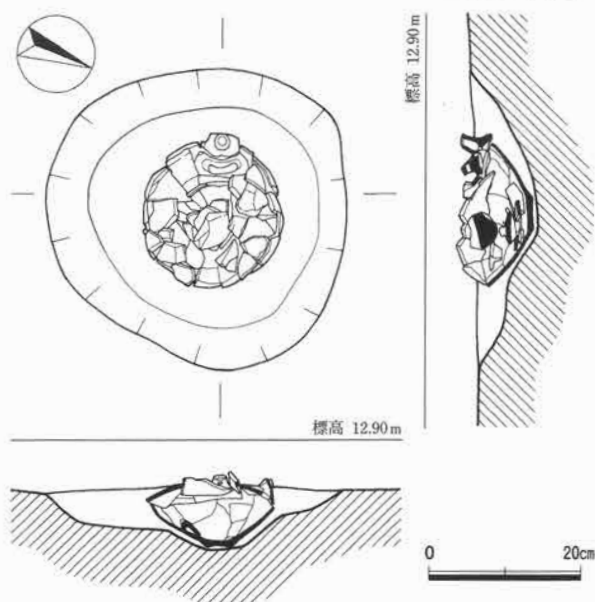
第24図 D区全景（北西上空から）



第25図 D区遺構配置図（1/300）

S X 29 (第26・27図)

直径40cmの掘り形に土瓶が正立した状態で出土した。蓋は瓶の中に落ち込み、蓋の上には8cm大の安山



第26図 S X 29実測図 (1/10)



第27図 S X 29 (北から)



16



17



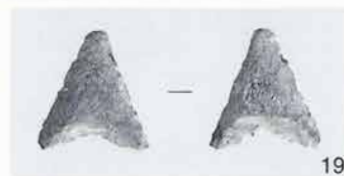
22
21



20

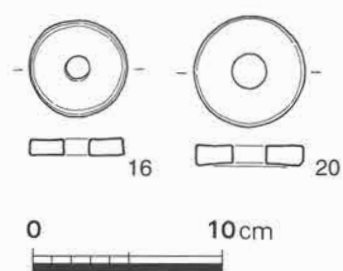


18



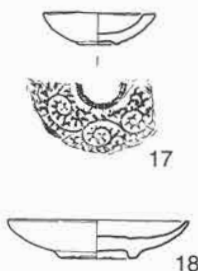
19

第28図 D区出土遺物



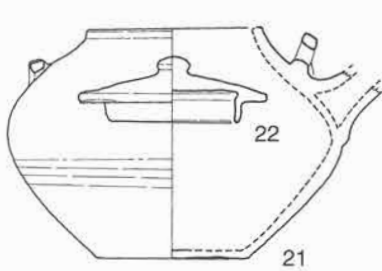
16

20

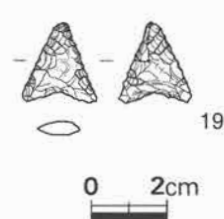


17

18



21



19

第29図 D区出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

第4表 D区出土遺物観察表

No.	出土遺構	器 種	法 量 (cm)			装 飾			銘・印	産 地	年 代	備 考	遺物番号
			口 径	底 径	器 高	絵付・釉薬	文 様	その他					
16	D区SX25	磁器滑車	長 径 5.1	短 径 5.0	厚 さ 0.9	透明釉					19C		199905 00016
17	D区SX26	磁器紅皿	[6.0]	2.1	1.6	白 磁	蛸唐草文				18C~ 19C		199905 00017
18	D区SX26	磁器小皿	[9.6]	4.1	1.6	染 付	草 花 文	高台に 砂付着			19C	内底部蛇ノ目 釉 剥 ぎ	199905 00018
19	D区SX27	サスカイト製 鏝	長 さ (2.1)	幅 1.9	厚 さ 0.4								199905 00019
20	D区SX28	磁器滑車	長 径 5.9	短 径 5.8	厚 さ 1.2	透明釉					19C		199905 00020
21	D区SX29	陶器土瓶	(9.2)	7.9	12.2	銅緑釉					19C~ 明治	胞衣壺に転用	199905 00021
22	D区SX29	陶器土瓶蓋	10.0	つまみ径 1.7	3.5	銅緑釉					19C~ 明治		199905 00022

岩が重なっており、埋納後、蓋の上に石を置いたものと思われる。掘り形の底面は、瓶の底径に合わせた形状を呈する。土瓶は銅緑釉をかけた陶器で、19世紀から明治時代の所産である。

他の出土遺物は、攪乱の埋土中より出土したものである。

5) E 区

B区の南に位置する調査区で、異なる事業範囲の境となる部分である。第31図では、網を掛けていない部分が区画整理に伴う調査範囲である。網掛け部は西鉄大牟田線の高架事業に伴う調査を表している。

E区の遺構検出面は、A区の標高から約70cm下がる。金丸川へ向かう丘陵の縁に当たる地点である。



第30図 E区全景（北東から）



第31図 E区遺構配置図 (1/300)

調査区で検出した遺構は、畑地の土壌改良を行う際に溝状に掘られた底面部分、つまり、スコップの刺し込み跡であった。

網掛け部の第2次調査については、東西溝1条、土坑5基、褐色や黒褐色の埋土有するピットを18個、それに樹木倒壊痕を1基検出した。また、地山から黒耀石製の鏝が1点出土している。

6) F区 (F-東区・F-西区)

A区の北に設定した調査区である。排土置き場が限定されたため、やむなく調査区を縮小せざるを得なかった。東区と西区に分けて調査を実施した。

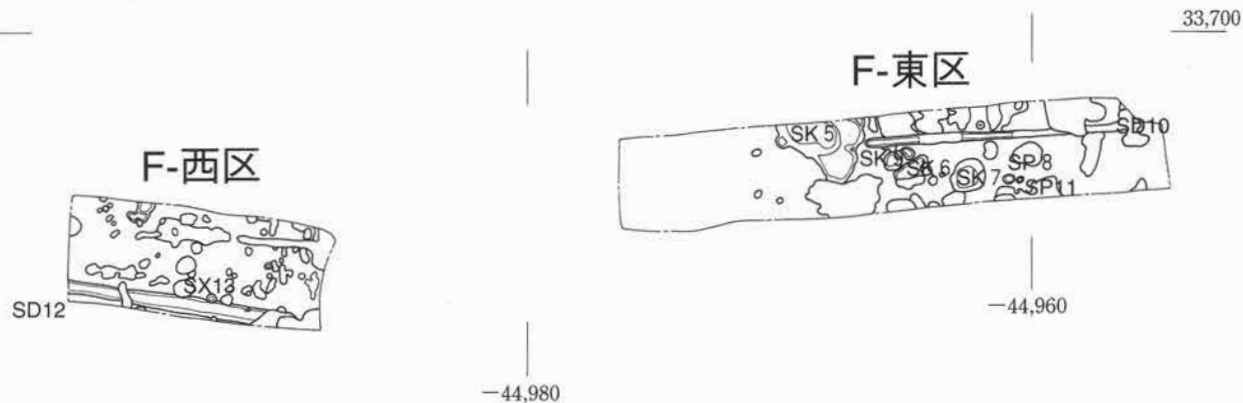
東区は、対象地の北側に幅4m×長さ22mの東西トレンチを設定した。旧家屋の基礎が表土から50cm程



第32図 F-東区全景 (東から)



第33図 F-西区全景 (東から)



第34図 F区遺構配置図 (1/300)



第35図 SK5 (南から)



第36図 SD12 (東から)

の深さで入っており、遺構検出面は荒れた状態であった。検出した遺構は、溝1条、土坑4基、ピットである。

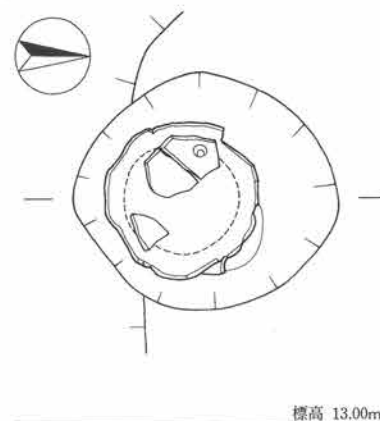
SK5 (第35図)

褐色の埋土を有する土坑で、不整形を呈する。調査区外に延びるため、規模を把握できなかった。磁器碗・皿・紅皿、色絵碗など94点の遺物が出土した。

西区は、幅4.5m×長さ11mのトレンチを設けた。東区の遺構検出面よりも約60cm高い位置で遺構を検出した。検出遺構の多くは現代のものであり、辛うじて、溝1条、胞衣土坑1基を検出した。



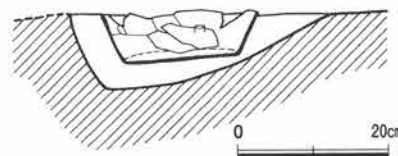
第37図 SX13(北から)



標高 13.00m

S D12 (第36図)

調査区の南側を東西に走行する溝で、検出長9.4m、幅45～70cm、深さ7～19cmを測る。黒褐色の埋土を有する。底面は船底状を呈し、西へ向かって標高を下げる。出土遺物は、磁器皿、陶器小皿・甕・播鉢など7点である。明治期の溝と考えられる。



第38図 SX13実測図(1/10)

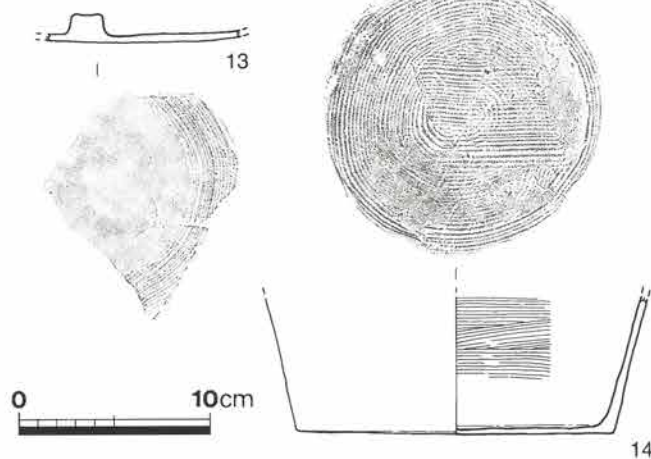


13



14

第39図 SX13出土遺物



第40図 SX13出土遺物実測図(1/4)

第5表 F区SX13出土遺物観察表

No.	出土遺構	器 種	法 量 (cm)			装 飾			銘・印	産 地	年 代	備 考	遺物番号
			口 径	底 径	器 高	絵付・釉薬	文 様	その他					
13	F区西 SX13	土師質火消壺蓋			(1.6)							内面周縁を櫛目調整、外面はナデ	199905 00013
14	F区西 SX13	土師質火消壺		16.7	(7.4)							胞衣壺に転用 内面は櫛目調整	199905 00014

S X13 (第37～40図)

S D12の北に接する位置で検出した。掘り形は直径35cmの円形を呈し、底面は南に向かって下がる。底面の直上に土師質の壺を正立状態に置いている。蓋は底面まで落ち込み、つまみの周辺部分が残存していた。火消し壺を胞衣壺に転用したと思われる。

4. ま と め

金丸遺跡第1次調査では、当初予測した古墳時代の遺構は発見できなかった。しかし、住宅地として構成された今日の町並みの歴史を、江戸時代後期まで遡ることができたのは、これから改変する金丸地区の歴史の一端を解明できたと言えよう。また、人工的な地形の下から旧状を確認したことも今後の調査に活きる資料である。

C区トレンチの壁面土層で確認した層序が、今回の調査地における土地利用の変遷を物語っていた。宅地→水田→畑地→溝の順に時期は古くなる。畑地から水田へ移行する時期は、大正3年の安武村耕地整理組合による灌漑用導水路・幹支線、揚水機の建設である。これは、筑後川から揚水し、1,068町余の畑地・水田を潤す計画であり、水田面積の増加の契機となった一大事業であった。灌漑水路は金丸遺跡内を通過しており、大正3年以降に畑地から水田へと土地利用が変化したと考えられる。

次に、地形に目を転ずると、A・B・E区とD・C区の一部は削平を受けているが、標高13.2mのA区を頂部として、四方に緩やかに下がる地形を示す。特にD区南西隅は、標高11.8mと最も低くなり、さらに南方の金丸川に向かって、小さな谷を形成する地形を表している。金丸遺跡が乗る丘陵の端部には起伏が多く見られ、このような小規模な谷が何本も入っていたことが窺える。

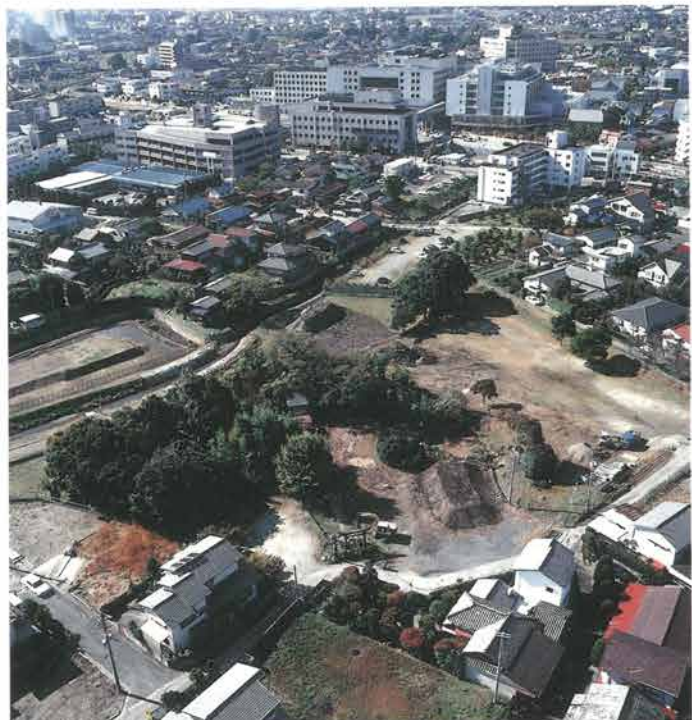
第1次調査を終えて遺跡の状況を振り返ると、江戸時代後期から明治時代の遺構が少ないながらも存在している。集落に伴う畑地が広がっていたと考えられる。今後、調査地点は金丸川を望む地域に進んで行くため、さらなる新知見を得ることができよう。

5. 付 編

—金丸稲荷社について—

第1次調査地の南西50mに金丸稲荷社が位置する。この社も区画整理事業に伴い境内の様相を新たにしている。そこで、現存する金丸稲荷社について若干触れておきたい。

『石原家記』正徳4年(1714)の条に、「老若男女身分を問わず参詣した」と記され、江戸時代中期には存在していたことが分かる。また、『米府年表』には、延享2年(1745)に7代藩主頼暲の実母である盛徳院が金丸神社に寄進した旨を記されている。創建時期は判然としない。しかし、参詣者で賑ったことは窺える。さらに、日吉神社蔵の天保7年(1836)『金丸稲荷修理寄附銀高控』には、「泉水中島の手入れ、板橋の新建立」とあり、境内内に「お池さん」と呼ばれる泉水を備えており、当時、有力な神社であったと思われる。



第41図 金丸神社とその周辺風景（北東上空から）

報告書抄録

ふりがな	かなまるいせき						
書名	金丸遺跡						
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第160集						
編著者名	園井正隆						
編集機関	久留米市教育委員会						
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎ 0942-30-9225						
発行年月日	西暦 2000年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
かなまるいせき 金丸遺跡	ふくおかけんく めし 福岡県久留米市 にしまち 西町 1436-3 他	40203	33度 18分 05秒	130度 30分 00秒	1999年4月21日 ～2000年3月31日	3,075 m ²	花畑駅周辺土地 区画整理事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	北緯	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
金丸遺跡	集 落	江戸～ 明治時代	溝 6 条 土 坑 2 0 基		近 世 陶 磁 器 近 代 陶 磁 器 石	江戸時代後期から明治 時代の集落・畑地を検出。	

久留米市都市計画事業
「花畑駅周辺土地区画整理事業」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

金 丸 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第160集
発行 2000年 3月31日

編 集 久留米市教育委員会 教育文化部
文化財保護課

発 行 久留米市教育委員会
〒830-8520 久留米市城南町15-3

印 刷 (株)東 広 印 刷
〒839-0841 久留米市御井旗崎 5-1-20